

在宅生活を支え 看取りまでかかわる看多機



株式会社つづけ丘在宅総合センター
代表取締役 金沢 二美枝



最期の望みをかなえることができる 看護小規模多機能型居宅介護 ケアホーム希望

「やっぱり家がいい」「家で最期を迎えたい」という願いに在宅医療の必要性を強く感じ、訪問看護に携わるようになって21年になる。

地域で訪問診療をする医師も増え、24時間365日の緊急支援体制が整い、在宅での看取りも充分に行えるようになってきたが、近年はますます高齢化・核家族化が進み、仕事と年老いた親の介護を両立させるには、介護負担が大きい。さらに、老老介護や認認介護は精神的にも肉体的にも限界があり、家族はやむを得ず入院や施設入所を選択せざるを得ない状況にある。

平成27年に開設したケアホーム希望は、こうした高齢者の最期の願いをかなえるため、医療的ケア

が必要な要介護度が高い利用者の受入れを行い、必要に応じて「通い」「泊まり」「訪問介護」「訪問看護」を臨機応変に組み合わせてマネジメントし、ケアを行っている。

現在のケアホーム希望の登録人数は満員の29名で、平均介護度は4、平均年齢は85歳である。利用者は認知症やパーキンソン病、末期がん、脳梗塞後遺症、誤嚥性肺炎などの病を抱え、気管切開、胃ろう造設、中心静脈栄養、尿カテーテル留置や人工肛門、褥瘡などで医療的処置が必要な利用者が多い。在宅で介護するには介護負担が大きい利用者を支援しながらターミナルケアまで行い、年間で8～10名の利用者を家族とともに看送っている。



写真1 事業所の外観

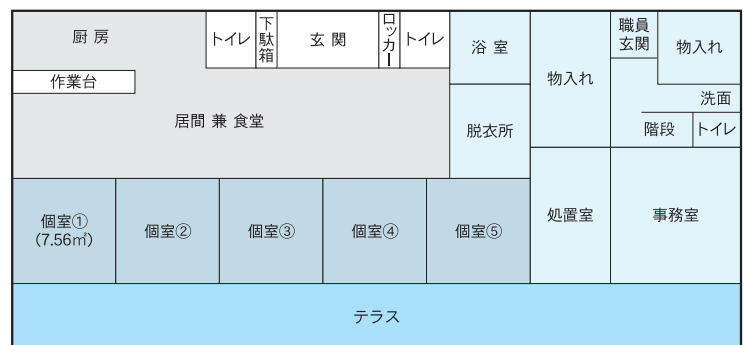


図 ケアホーム希望の間取り図



人材確保のための独自の取り組み

事業所はコーポの1階を改修して使用しており、建築費用が大幅に削減できた（前ページ図）。また、照明器具やテーブル、イス、食器類など、リサイクル品を使用することで、初期投資を抑えられた。その分、開設当初から「人員確保、ではなく、経験値や優秀で適切な「人材確保、をすることができた。

ケアホーム希望では人材確保と人材育成に力を入れており、初期費用を押さえられた分も含めて職員への教育費、賃金アップに還元している。

具体的な取り組みとしては、職員へは資格取得やスキルアップ向上への研修参加費などの教育費を一部負担するなどの援助やモチベーションアップのための能力給制度、また昇給時の査定評価制度を自社独自の基準を設けて実施している。

看護師による勉強会や事例検討会、介護職による

認知症実践ケアの勉強会、介護福祉士やケアマネジャーの資格取得のための勉強会を職員同士で行い、職員全体のレベルアップを図っている。このような職員同士のお互いの能力向上が賃金アップにつながっている。



写真2 内部研修の様子



看護師は看多機の主役ではなく介護職を医療で支える役割

看多機の運営で大切なのは、看護師と介護職がお互いの仕事内容を理解し、協力できる体制にあることである。介護職が身の回りの世話で忙しければ看護師がサポートするといったような、お互いの業務内容を尊重する姿勢が大切である。看護師は介護職に医療的ケアを指導し、さらに痰の吸引や胃ろう注入等の指導をする。逆に看護師は介護職から認知症の上手な対応方法を学び、ケアの質を高めていく。この関係性が現場では重要なのである。

ケアホーム希望では、日々の運営においては、リーダー介護職が業務を統括し、看護師への業務内容も把握し指示出しをしている。

看護師は医療的処置以外にも介護職と協力し積極的にレクリエーション活動への参加や送迎、訪問な

どを行い、互いの業務内容を理解し、常に協力体制が取れる関係性を築いている。また、在宅ケア経験のあるベテラン看護師を採用し運営規定の人員基準より1名多い看護師を配置している。

現場で医療的処置を行う際には介護職も一緒に立ち会い、その場で実践指導を行っている。痰の吸引や胃ろう注入などは、研修を終了した介護職が看護師の指導の下対応することで、業務に偏りがなくなり、バランスのよい人員配置を組むことができる。

また、看多機は利用料が定額であるため、家族は必要以上に「訪問」や「泊まり」、「通い」のサービスを増やしたいと思うものだが、本人の有する能力を高め、家族ができることを明確にし、できることは行ってもらようようケア方法などを具体的に指導

し、家族へ徹底教育するとともにフォローアップをしていくことが重要である。当事業所では、例えば、嚥下機能が弱い利用者に対して、介護をする家族に直接看護師から食事形態や摂取方法、口腔ケアなどを指導し、感染予防として、おむつ交換や陰部洗浄、清拭などを介護職と一緒に家族が安心してできるようにまで徹底指導している。さらに自宅を過ごす際の注意事項や緊急時の対処方法を書面に書き出し、自宅へ訪問した際には確認・レクチャーを行っている。

運営推進会議や家族会では、介護についての悩みや問題点、対応方法などを家族同士で話し合える場を設けている。同じ悩みを持っていることを知るだけでも介護に対するストレスが軽減されるからだ。この時間は職員においても大切な時間で、家族の介護負担の大きさや悩みを知ることにより家族と介護上の問題点を共有でき、課題解決に必要な支援は何かを考える重要な機会となり、スキルアップにもつながる。



看護小規模多機能型居宅介護ケアホーム希望での看取り

84歳、女性の方。年を取り、物忘れが多くなってきて何度も同じものを買ってきてしまう。認知症ではないかと、夫と一緒に認知症外来に行ったこともあった。自分では何が何だか分からなくなっているという。また、大病をし大学病院に入院。退院後は介護が大変だからとケアホーム希望を利用することになった。

ケアホーム希望では、花見に行ったり、自治会のお祭りにも参加したり本当に楽しいことがいっぱいあった。毎日美味しいものもいっぱい食べて、利用者や職員の人々と歌ったり笑ったりした。

時々体調を崩し入退院を繰り返すこともあり、入院中は身体を抑制され身動きできずに大声を出したら個室に移されてお金もたくさん掛かってしまった。また、薬もたくさん飲むことになり、さらに訳が分からないことを言ったこともあった。入院するたびに足腰が弱り、歩けなくなって夜もだんだん眠れなくなり、精神科にも入院した。個室にはカギが掛けられ異様な雰囲気家族にとって一番つらい入院であった。

どんなに大変でも夫は毎日面会に行き、やっと退院してケアホーム希望に戻れたときは、みんなのにぎやかな声が聞けてうれしそうにしていた。

毎日みんなに声を掛けてもらえたと、貧血が進むと往診医と相談しケアホーム希望で輸血まで行ってもらった。病院にいるときよりずっと安心して治療ができ、夫は「がんばれ、がんばれ」と最期まで声をかけ隣で一緒に寝泊まりし、職員と一緒に介護を行い、へとへとになりながらも妻を天国へと看送った。

夫は、「ここは自分の家ではないが、認知症や病気になって一番長く世話になった第二のわが家で、職員はみんな私の家族のようだった」と述べられた。



ケアホーム希望は、本人を思い、人生の最期をその人らしく大事に看取っており、やりがいがある魅力的な職場であると自負している。看取りにかかわる人たちの気持ちやかかわり方一つで本人の苦痛緩和にもつながる。「手を握る」「声を掛ける」「触れ

る」など、本人の不安を取り除くことで穏やかに逝くことができる。最期を「看取る」ではなく、最期を迎えるまでの過程が大事であり、利用者本人、家族に「ここで良かった」と思ってもらえるかが大切である。